

Title	歴史學的勞作と歴史家の個性
Sub Title	
Author	板垣, 鷹穂(Itagaki, Takao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1926
Jtitle	哲學 No.1 (1926. 10) ,p.91- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000001-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000001-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 歴史學的勞作と歴史家の個性

板垣鷹穂

Ausserdem aber können wir uns von den Absichten unserer eigenen Zeit und Persönlichkeit nie ganz losmachen, und dies ist vielleicht der schlimmere Feind der Erkenntnis.

J. Burckhardt

## はしがわ

「歴史學は事實を曲げるものである」——とバーバラ・ドックスがある。歴史を通して其の「卓見」を衒はうとする批評家達や、歴史の追想に感情の浪費を惜しまないディレッタントにとつて、此の言葉はたしかに都合の良い口實となるであらう。

然し、正しい意味に「歴史」を考へやうとする人達も亦、此の言葉の内に一面の眞理を見出すことが出来やうと思ふ。例へば、シカミエ夫人を描いた二枚の有名な肖像

畫が——その目的とするところは、エスピリに富んだ此の夫人の性格を描くことでありながら——互に全く感じを異にしてゐて、何れも濃厚に筆者の性格や時代趣味の相異を表はしてゐるやうに、今若し、文化史上の光彩ある「端役」たるレカミエ夫人に就いて、小傳を編もうとする二人の歴史家を想像するならば、彼等の叙述も亦互に異つたものとなり得たであらう。純粹に客觀的であるらしく思はれる歴史學の考察に、實は歴史家の個性が深く干與してゐて、なほ其の上に、時代精神の感化さへ明らかに觀取される。——上のパラドックスをかく解することによつて、方法論上の極めて興味ある一つのテーマが興へられる。

歴史學の性質を、其の科學的勞作の具體的な姿のまゝで考察してみたならば——と云ふことが、近頃私の心を支配してゐる願望である。歴史學の勞作から得られた科學的成果丈を所與として、其の論理的性質を分析しやうとする批判的考察も、それ自身としては充分意味のあることであらう。然しこれのみでは未だ何處となく物足りない。もつと具體的に、科學的勞作の様々な過程に就いて歴史學の性質を觀察することも、亦興味あることでもあり必要でもありはしまいか？歴

史學を、其の合理化され概念化された姿に於いて考察するばかりでなく、種々なる非合理性や偶然的要素を含有した有りのまゝの「生活状態」に就いて観察することも、亦意味のあることではなからうか？

此の拙き小論が、かかる要求に促された一つの「習作」にすぎぬことは斷るまでもないが、私としては若干の辯護を豫め加へて置きたい。第一に——此の「習作」は嚴密な論理的基礎を缺いてゐる。簡単な前提から直ちに出發したり、連絡してゐる問題を途中で断ち切つたりしてゐる處も少くない。然し何處までも、経験的歴史學の視野の内丈に考察を限らうとする目論見としては、此の點を許されてありたいと思ふ。第二に——長い引用文があまり多すぎる。これ等の引用文が讀者を甚しく倦ましめるることは私もよく承知してゐるが、可成く「生きた實物」から例を取り、出来る丈、概念的な議論を避けたいと考へた此の試みの性質として、これも止むを得ぬことであつた。

## a 序論として

### —歴史的實在と歴史學的考察—

#### 一

歴史的實在の概念を定めるために、殊更煩瑣な、しかも、あまり役に立たぬ定義等を試みやうとは思はない。例外なく當嵌まるやうな定義を下さうとすることは、一般に報ひられることの少ない、多くは全く徒勞に終る試みたるに過ぎぬ。講義の第一時間目に學生を倦ましむるのは、實に此の種の無駄な定義であらう。然し、目下のテーマに必要な前提として、これを全然不問に付し去るわけにも行くまいと思ふから、最初に唯だ極くあつさりと觸れて置きたい。

リッケルトのやうに一切を形式の方面からのみ考察して、同じ實在が、方法論的形式を通して自然科學的にも歴史學的にも把握されると考へる場合にあつては、特に歴史的實在を限定する必要がない。けれどもデイルタイの如く、考察される材料の性質が考察の方法を規定して行くと見做す立場にとつては、歴史的實在如

何の問題が生じて来る。但しデイルタイにあつては、自然現象を「説明」する自然科學に對して、精神現象を「理解」するものとして、唯だ漠然と精神科學を考へる丈であるから、一般精神科學の内に包含される歴史學に對しても、單に「歴史的社會的實在」(Geschichtlich=gesellschaftliche Wirklichkeiten)を對立させてゐるに過ぎぬ。然しこのGeschichtlich=gesellschaftliche Wirklichkeitenは精神科學一般に對しての所與であるかむ、雖しく精神科學に屬する歴史學と systematische Geisteswissenschaften(經濟學の如きの)とは、唯だ各個の認識目的によつて區別される丈である。

かたゞ、マルクス・ハイムが其の方法論的研究の内に試みてゐる——多くの示例と説明と批評との後に漸く到達した——念入りな定義<sup>(1)</sup>の如きも、總當であると同様に甚だ空虚な、少しも核心に觸れてゐない限定の爲方である。勉めて片寄つた結論を避け、且つ、非本質的な要素の混入を防がうとする結果は、勢ひ消極的な限定に終らざるを得ない。かかる怠屈極まる問題から可成く速かに解放されたい私としては、唯だ後の論述に必要な前提を求める丈に止まらう。そしておあたり alles Ersehnte und Geschaffene der Menschheit<sup>(2)</sup>とハーメン・プランゲルの言葉を借りて、簡単に

歴史的實在の意味を代表するやて置く。且下の立場として私は實現なるべく理想と此の理想を實現せんとする意志と其意志の結果とを以て歴史的實在の本質的要素と見做したる。もう一步根本的な立場に歸るならば創造する意志其物が最も純粹にして具體的なる歴史的實在だと考へられる。ハイヒテの所謂「天國に住む」とが同時に歴史に參與することだと考へられると解し得る。—— Das, was sie Himmel nennen, liegt nicht jenseits des Grabes, es ist schon hier um unser Natur verbreitet, und sein Licht geht in jedem reinen Herzen auf.<sup>(3)</sup> 然しう來る丈經驗的に歴史的實在を考へようとする場合には alles Ersehnte の世界のみならず、 alles Geschaffene の相をも考へて行かなければならぬから、 いふべきは、 ハンブルグの薦葉を借りて、 歴史的實在の意味を alles Ersehnte und Geschaffene der Menschheit と呼んで置かう。

## II

限りなく繰り返し引用されてゐる「實踐理性批判」の有名な結辭、 こゝは、 自然と文化との二元性を認め歴史的實在の意味に動かすべかられる基礎を置いた最初の

言葉であつた。かの天體の運行にも比すべき深き力の自覺によつて、一抹の煙りにも等しき人生の意義が高められた。スピノーザの歸念より新たなる創造の營みへ——歴史の意義を其の正しき相に於いて肯定せんとする思索が此處に展ける。カントの後繼者として道徳法の權威を只管に説いたフィヒテは、其の人格のあまりに嚴格なるが故に、有るが儘なる現世の諸相を悉とく肯定する丈の雅量を持たなかつた。彼の後期の思想が著しく濃厚な宗教的色彩を帶びて來たことは極めて自然な成り行きと云はねばならぬ。

其處にヘーゲルが出て来る。フィヒテをして熱烈な愛國の情を披瀝せしめたナポレオンに對してさへ「世界精神の騎行する様」を見出して喜んだヘーゲルは、現世一切の諸相を裁かずには肯定した。清汚交はり流るゝ世相の奥底に統一的な意味を認め、破壊の内に新なる建設の萌芽を見出した。歴史はそれ自身の具體的な姿の内に自己の目的を實現してゐる。フィヒテの思想にまで影のやうに残つてゐたアウグスティヌス以來の遺物——神の國——の完全に消失する時が來た。別に超越的なる世界を想定しなくとも、經驗的世界其の儘の諸相の中に最高の目的が

實現されつゝある。人間的な一切の熱情慾望其他のいがいが其儘の姿で神の意志を實現して行く。最も廣き意味に於ける *alles Ersehnte und Geschaffene der Menschheit* が歴史的實在を構成する。

然し「神の國」は消失しても神其物はなほ依然として存在してゐる。歴史を動かす人間的慾望の背後に神の詐術があり、詐術を用ひて己が意圖を實現しやうとする神の意志がある。有るが儘の姿に現世の諸相を肯定せんがために一種の辯神論を説くことが、ヘーゲルにとつては必要だつたのである。

ヘーゲルの時代までもまだその支配權を失はずにゐる神は、何時になつたら一切を人に委ねやうとするのか？或はまた何等かの形に姿を變へつゝ何處までも其の統治權を保たうとするのであらうか？之は興味深い問題である。經驗的科學として眞の意味に於ける歴史學を大成したランケは、ヘーゲルの歴史觀を否定しつゝも其の影響を多分に受けた。ランケの歴史觀には既に神の支配權がないが然し極めて漠とした神の存在丈は否定することが出來ぬ。生涯を通じて世界史の統一的叙述に心を惹かれた彼の信念は、即興的に試みたマキシミリアン

11世のための御前講演や非常に高齢になつて着手した未完成の世界歴史となりて具體化されてゐるが、此の深い世界史的信念の中には「神の先見」が秘ひでゐた。歴史思想史を説くものは、カント以來の獨逸理想主義者の内にランケをも數へるのが常である。

### III

然し如何にランケがヘーゲルより受くる所多かれどは、<sup>15</sup> ランケとヘーゲルとの間には根本的な相異がある。時間的に経過する歴史的實在の展開を形而上學の立場から論理的に演繹するヘーゲルに對し、<sup>16</sup> ランケが——史學の泰斗たる彼の名に相應しい嚴格れを以て——純粹史學の立脚地から構成的考察を行つてゐるにむせ冗談かぬじふなかへり。Vom Standpunkte der göttlichen Idee kann ich mir die Sache nicht anders denken, als dass die Menschheit eine unendliche Mannigfaltigkeit von Entwicklungen in sich birgt, welche nach und nach zum Vorschein kommen, und zwar nach Gesetzen, die uns unbekannt sind, geheimnisvoller und grösser, als man denkt。——ランケ

にあつては史學に許された問題の限界が極めて明瞭である。把握の方法や表現の手段に於ては彼の偉大な後繼者ブルクハルトと異なるところがあるが、飽くまで経験的事實の内在的考察に固執する根本的態度に於ては、此の最も徹底したる文明史家に對してすら、何等相異する處を見出すことが出來ぬ。

常に唯だ史料の世界にのみ沈潛してゐる歴史家にとつても、何等かの意味に於て、神の支配を肯定することは有りさうに思はれる。創造の業の美しさの故に、展開の姿の鮮かさの故に、文化の諸相の多様さの故に、歴史を愛する心から神を讀ふる言葉が出て來てもよささうに考へられる。創造されたるものに親しむ心が深ければ深い丈、創造主の偉大さを偲ぶことが自然であるやうに感じられる。けれども歴史家達は、決して此の境地にまで彼等の探究を進めやうとしない。歴史家にとつては人の世の起き伏しのみが意味をもつ。人間の意志と熱情と慾望とに築かれた世界のみが歴史家の興味を惹く。alles Ersehnte und Geschaffene der Menschheit のみが歴史家の世界である。超人間的な存在とか、歴史を支配する理法とか云ふ問題に關しては、彼等は絶対に語ることを欲しない。探究の餘暇に彼等の口

を洩るゝ断想から、歴史家の信仰のまとまつた形を築かうとする試みは常に失敗に終るであらう。上に引用したランケの言葉に於けるが如く、時として「神」を云々することはあつても、それは唯だ、自己の知識の限界を表示する代名詞にすぎない。歴史家の語る「神」はソクラテスの説くダイモニオンのごときものである。

#### 四

歴史家は経験的に與へられた世界のみを固執する。彼等にとつては経験的歴史的實在のみが考察の對象である。かかる實在以外に何物をも彼等は要求しないし、「事實」以外の何物をも否定するだらう。然し経験的實在は、其の本來の姿のまま直接歴史家に與へられるものでなく、従つて其の儘で歴史學の材料となるわけには行かない。既に述べたごとく、経験的立場よりみたる歴史的實在の最も具體的な相に於ては、實現するべき理想と、此の理想を實現せんとする意志と、其の行為の結果とが、渾然たる姿のまゝに存在する。然るに史學の材料として遺存し、歴史家の眼にふれ、追想の縁となるものは、實のところ其の僅少なる一部に過ぎない。

alles Ersehnte und Geschaffene der Menschheit は唯だ少數の光彩陸離たる代表者を史

料の世界に止め、其他は淡い陰影を残すばかりである。唯だ氣まぐれな運命の手に扱はれる全然非合理的な抽象作用が、歴史的眞實在の内から史料の世界を作り上げる。史料の世界は、如何にそれ自身が具體的であつても、眞實在の豊かなる相に比すべくもない。

上の事情を具體的な實例に就いて、もう一度考へなをしてみやう——ミケランジエロの生涯を通ずる最大の願望はジユリオ二世の墓を建設することであつた。が、此の呪はれたる建設事業の名残は、サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリの薄暗い奥堂とルーブル宮の冷めたい一室とに、其の片影を止めるに過ぎぬ。あれ丈の貧しい遺品から生涯戀々として見棄てることを欲しなかつた彼の壯圖を彷彿させるることは困難であらう。サンタ・マリア・デ・グラチエの僧院に描かれた壯嚴極みなきレオナルドの晩餐が、如何に超人的な深き準備の結果であるかを語るものは、二十餘年の間に試みられた若干の小さき素描と、數篇の眞偽不明なる逸話とに過ぎない。レネサンスの文化を一身に體驗してゐた此の大精神が、その晩餐を描き上げるまでに経たる全構想の具體的なる姿を追想することは、此等の史料を以てして

は全く不可能である。更に「平和の殿堂の上にバンテオンの穹窿を戴かしめん」と豪語せるプラマンテの、意中に夢想されてゐたサン・ピエトロ寺院の勇姿を、ウフィチ画廊の黄ばんだ一枚の素描から想像するは思ひもよらぬことである。

然し、運命を歎げきながらも、モーゼや「奴隸」を完成し得たことはミケランジェロに與へられた非常な恵みであり、剝落甚しあとは云へ空前絶後の傑作を完成し得たことは、寡作なレオナルドにとつて、むしろ奇蹟的な好運であつた。彼等の背後には、豊かな才を抱き勇圖を夢に描きつゝも、終に表現の機を與へられず、空しく虚無の内に消え去つた多くの無名作家のあることを思はねばならぬ。一代の光榮ある文化を讀ふるとき、吾人は史料の世界に撰び出された其の代表者達の事蹟を偲ぶ丈であるが、其の文化の眞に具體的なる實相は、名もなき幾多の人々の理想と意志とを待つて初めて完きものと云へやう。彼等の努力の貴さは獨り永遠の神のみ知る。吾人は唯だ想像の内に彼等の遺志を弔ひ得るに過ぎない。されば、運命によつて抽象されたる史料の世界は、眞に具體的なる全歴史的事實に比すれば甚しく貧しいもので、歴史家は、此の貧しき史料を通して、しかも豊かなる實相を洞察

しなければならぬ事情にある。

歴史家にとつては史料のみが唯一の所與である。その科學的考察を行ふにあたつては、一時代の多面的な世相を組み立てるにしても、一大精神の體驗の深さを測るにしても、現存する史料丈が唯一の與へられたる材料である。かかる史料を取捨選擇し連絡し組み立てながら、出来る丈具體的に出來る丈個性化的に過去の實相を洞察し追想し描寫するところに、歴史學的勞作の目的がある。抽象されたる殘存物から、出來る丈、本來の具體的な姿を彷彿させることが、歴史家に課せられた眞の任務であらねばならぬ。

## 五

そこで以上のことから歴史的考察の意味を限定してみると、第一に歴史家は、史料を通して、考察の對象となつてゐる史實の具體的な姿を洞察し追想し理解しなければならず、第二に、かかる史實を、其の具體性と個性とを保たしめつゝ整理し、規定されたる目標に従つて把握しなければならず、第三に、其の個性的性質を出来る

丈明らかに浮出させながら、此の史實を描寫し表現しなければならぬ。しかも此の三種の勞作にとつて材料として與へらるゝものは常に唯だ史料文である。史料を通じて理解すること、史料の内に把握の目標を見出すこと、史料を用ひて表現すること——考察の材料としては史料のみが唯一の許容されたるものでありながら、しかも考察の對象は常に史料以上の世界である。従つて歴史家にとっては、其の純粹に科學的な勞作に於ても、一種藝術的創作に似た勞作が要求され、各歴史家の人格的個性と手際とに従つて、此の科學的な創作の内容と形式とに非常な相異が生じて来る。正しき歴史學上の規法に悖る非學術的な考察は問題外であるが、純粹に科學的な、極めて必然な順序を経て行はれる勞作にあつても、歴史家の人格的個性が考察の成果に影響を及ぼすことは當然である。自然科學の勞作にあつても、學者の個性的相異が假設の建て方や理論の導き方に影響を與へてゐることは、ポアンカレーが興味深く叙述してゐるところであるが、歴史學に於ては、上述の如き此の科學の性質から遙かに濃く——明らかに種類の差に於いて——かかる現象が窺はれる。

## b 歴史の理解と歴史家の個性

Die Natur erklären wir, das Seelenleben verstehen wir. — 精神科學の統一的歸趣を理解 (Verstehen) 又は追憶 (Nacherleben) に見出し此の立場から一般精神科學と歷史學との方法論的考察を進めた代表者は云々までもなくデイルタイである。そこで今最初に考察しやうとしてゐる問題——歴史的理眞に必然關與する歴史家の個性——に就いては何をおいてもデイルタイの理論の吟味から出發するのが便利であらう。

デイルタイは既に其の後繼者シープランゲルが評してゐるやうに、全くの歴史家であつて、系統的な理論家ではない。かつて存在した偉大な思想家の精神生活の内に深く沈潜して、其の完き内容を彼自身の心の内に成熟せしめ、その精神生活を自らの内に Nacherleben することがデイルタイの哲學的態度であつた。彼は哲學者であるよりも哲學史家であつた。歴代思想家中でも、單に理論の世界に閉じ

こもる人より、生活の流れの中に思索を織り込む哲學者により多くの親しみと興味とを感じてゐたその趣味は、此處から來てゐる。そこで、デイルタイの説く歴史學上の理論も、亦等しくその深い歴史的考察の體験から生れた貴い成果であつて、單なる理論の綾からまとめて上げられたものではない。従つて、深く事實の核心に觸れた具體性をもつてはゐるが、然しそれ丈に、理論として突きつめるときは、不徹底な感あるを免れぬ。恐らく理論家となり切るにしては、彼はあまりに歴史家であつたのであらう。それ故、今此處にデイルタイの理論を吟味するにあたつても、多くの不徹底な點は不徹底な儘で、さしあたり必要な範圍の考察丈に止めて置く。デイルタイの理論其物に就いて考へることは、目下私に許されてゐないし本稿の目的でもない。

方法は對象によつて規定される。自然科學と精神科學とは、各の對象が要求する方法上の相異から區別される。自然界の事實は、意識内に外部から現象としてしかもバラ／＼に、何等の連絡もなく與へられるのであるが、精神界の事實は、之に反して内部から、實在として、しかも其の激動たる連關に於て本質的に體驗される。

それ故、自然科學の考察にあつては、此の「ラム」な現象を補足しつゝ統一的に組み立て、行くために、假説を設けて「説明」することが必要である。しかるに精神科學の考察にあつては、本原的に與へられてゐる精神生活の生きた連關を、其の儘の姿や「體験」し「理解」して行くのである。<sup>(6)</sup> 然し此の、それ自身内面的に統一されてゐる連關を、其の儘の具體的な姿に觀察し把握し理解し得んがためには、觀者自らの體験があづからなければならぬ。即ち、自他の體験を比較することによつて、觀察の對象となつてゐる精神生活の連關を理解しなければならぬ。換言すれば、對象の連關内に自己の主觀を沈潜し、自己の體験を以て觀察の對象なる體験を把握し、nachdenken → nacherleben → なむべきだ。 Nicht begriffliches Verfahren bildet die Grundlage der Geisteswissenschaften, sondern Innewerden eines psychischen Zustandes in seiner Ganzheit und Wiederfinden desselben im Nacherleben. Leben erfasst hier Leben.

「理解」は人の日常生活にとつても、歴史の追憶にとつても、また一切精神科學の考察にとつても常に其の基本的な條件である。下は幼兒の Lallen から上は Hamlet や Vernunftkritik と至るまで、仕草、表情、言語、文字の類から社會組織や立法まで、或は

また、大理石に刻まれた形とか、音楽に組立てられた音の如きのままで、總てが「理解」を要求する。<sup>(8)</sup> そして、かかる「理解」を基礎として始めて歴史的考察が可能となる。

しかも、此の理解を可能ならしめるものは、観察者の主觀的體験に基く理解に客觀的妥當性を與へんがために、或ば他人の精神生活の理解を可能ならしむべく、「精神の同形性」(Gleichförmigkeit)を豫想し、精神生活の構造連關 (Strukturzusammenhang des Seelenlebens) を把握すべく、「記述分析心理學」(beschreibende und Zergliedernde Psychologie)を定立し、又は Philologie と新しめ意味を與へ、之に基いて「薦葉なる」史料をも理解し得る「解釋の術」(Interpretationskunst)を求めてゐる。 Gleichförmigkeit せ「理解」を可能ならしむる論理的的前提であつて、之を豫想しない限り、他の精神生活を理解することが全然不可能となるべき根本制約である。(此の同形性の問題に、デイルタイの理論の難點があることは云ふまでもない)。 Strukturzusammenhang の考察は個人的並びに社會的精神生活の把握について中心題目であり、これによつて傳記、文化史、其他の歴史的考察が科學的客觀性を得る次第であるから、デイルタイ一派の精神科學派は特に此

の考察を重視し、シバランゲルの如きは一般精神科學 (Systematische Geisteswissenschaften ～ Geschichtswissenschaft) の基礎學として Strukturlehre を建てるに至る。更に Interpretationskunst は schriftliche Reste ～ stumme Reste より成る史料の解釋に客觀性を與へて歴史的解釋を可能ならしめやうとする歴史學の重要な補助手段である。此の場合デイリタベは特と Philologie と稱れる體が一切史料の解釋を確實ならしめるがためと Philologie ～ Interpretationskunst の規準的部門と見做してゐる。(此の點をアロイズ・リーグル其他ウイーン派學者の説く Kunstwollen 説や、ウヘルハーンの所謂 Sehform 等と比較關係をもてみる事は非常に興味あるテーマである)。然しこ上の準備的手段や補助學をもつてしても要するに歴史的解釋は Leben erfasst Leben である。以上の手段や補助學の網を通すことによつて、無暗に主觀的な隨意な解釋を防止することは出來やう。そしてまだ正しか理解がより容易に到達され得るとほんとあり得やう。然しそれ眞に聖者を讀く得る者は聖者のみである限り、觀察する者の體驗の深さは同時に理解の深さを限定する。デイルタイヨウは此の Interpretationskunst に就しては唯だ die persönliche Kunst und

*Virtuosität*として手際の巧拙を認めてゐる丈であるが、事實上、觀察者の個性的相異はもつと深く干與する。下は趣味の高低より上は倫理的信念の深淺に到るまで、觀察者的人格的個性は常に其の歴史的理解に反映する。理解の相異は同時に理解するものゝ心の相異であらねばならぬ。

例へばレオナルド・ダ・ヴィンチの深くして廣い個性を理解しやうとする者にとっては、ワザリの傳記、バンデルロの物語をはじめ、読みにくい左文字の手記とか未完成の額畫、剝落したフレスコ、其他無數の素描等が直接の史料として呈供される。それのみではない、歴史家は此等直接の史料の外に、なほ参考史料として、レオナルドを取りまく時代文化の一般狀態を理解するための史料を求めて、所謂るミリューノを考察する。即ちミラノ宮廷の有様とかフイレンツェの畫家組合の事情とかが之である。それから更に、レオナルドと類似した傾向を有する人——例へばレオン・バティスタ・アルベルティの如き——又は全然反対の性格を有する人——例へばミケランジエロの如き——を比較對照し等して、彼の個性を明らかにしやうとする。然し、如何に史料や補助手段が整つてゐても、それ丈で、レオナルドの精神

生活が有りの儘に理解されはしない。勿論、史料の扱ひ方や補助手段の利用法は歴史學の進歩と共に次第に巧妙になり、考察の成果は漸次正確の度を増しはするだらう。けれども終局に於いて、これ等直接間接の史料に眞の生命を吹き込むものは、觀察者自身の體験であらねばあらぬ。Leben erfasst Leben——此處に歴史的考察の犯し難い嚴肅さがある。歴史を眞に讃美し得る者と、讃へんと欲してしかも之を冒瀆するの罪過に陥る者との相異は、歴史に對する「理解」の相異であり、理解の相異は同時に理解する者の人格の相異である。

云ふまでもなく、必然的に觀察者の主觀が參與するこの限界は、歴史家自らが意識的に定置すべきものではない。既にランケが戒しめてゐるやうに、歴史家は飽くまで没自我的でなければならぬ。純客觀的な考察の内に自ら觀察者の人格が浸み出して出るのでなければならぬ。然しがゝる歴史的考察の限界を踏み越えるやうな試みも折々現はれて来る。中にはベルンハイムが苦々しげに「歴史を啓蒙期の狀態に引きもどす」と罵つたやうな、勝手氣儘な試みさへもある。が、時としては、純粹科學としての歴史的考察とは認められぬまでも、別な立場から見れば充

分存在の意義を有するものもあり、又は徒らに史料の塵の中に埋もれてゐる歴史家を刺戟して、新鮮な活力を考へるやうな目新しい試み等も見出される。例へば、歴史的理解に基いて逆に新時代を教育し、過去の生命を追想的に體驗しつゝ将来の精神生活を豊かにしやうとする試みとして、ディルタイの後繼者達(シプランゲル、リット等)の標榜する新しい教育學や、文學史上に一新生命を展してゐるグンドルフの英雄主義的歴史觀の如きは最もその著しい例であらう。殊にグンドルフが其の著「シーグヌアと獨逸精神」の序に述べてゐる歴史の解釋の如きは、充分注目すべきものである。—Geschichte hat es zu tun mit dem Lebendigen. Danach was jeder für das Lebendige hält bestimmt sich seine besondere Geschichtsauffassung und seine Methode.... Deshalb ist auch Methode nicht erlernbar und übertragbar, sofern es sich darum handelt darzustellen, nicht bloss zu sammeln. Methode ist Eslebnisart, und keine Geschichte hat Wert die nicht erlebt ist.... Das ist Pflicht und Recht der Geschichte, die ebenso sehr Wille zum Bild wie Wissen des Stoffs sein soll.

## 歴史的把握と歴史觀

ヤロハ・ハルクベルト其代表的著書イタリヤ・ノボナーバの文化の序ヒトの血  
脈を温めしる。

Die geistigen Umrisse einer Kulturrepoche geben vielleicht für jedes Auge ein verschiedenes Bild, . . . Auf dem weiten Meere, auf welches wir uns hinauswagen, sind der möglichen Wege und Richtungen viele, und leicht könnten dieselben Studien, welche für diese Arbeit gemacht wurden, unter den Händen eines anderen nicht nur eine ganz andere Benutzung und Behandlung erfahren, sondern auch zu wesentlich verschiedenen Schlüssen Anlass geben.

. . . Es ist die wesentlichste Schwierigkeit der Kulturgeschichte, dass sie ein grosses geistiges Kontinuum in einzelne scheinbar oft willkürliche Kategorien zerlegen muss, um es nur irgendwie zur Darstellung zu bringen.

\* ヤロハ・ハルクベルトは其代表的著書イタリヤ・ノボナーバの文化の序ヒトの血脈を温めしる。

り、其の嚴密なる考察法を以て文化史家の模範とされてゐるブルクハルトのかゝる告白こそは、茫漠たる史料の世界を通じて、かの絢爛にして混沌たる時代の實相を把握しやうと「Hinauswagen」したとき、彼自らが體驗したる實感に他ならぬ。一度でもブルクハルトの著書——「イタリア・レネサンスの文化」でも、「ヨンスタンティン大帝時代」でも、又は「イタリア・レネサンス建築史」でも——に眼を通した人は、史料を扱ふ彼特有の「超人的」と評しても差支へない程にすばらしいものであることを知つてゐるであらう。此の種の驚歎すべき大掛りな勞作を可能ならしめる彼の手際に就いて、彼自ら之を一種の直觀に歸し、歴史家は其の永い勞作の賜物として、かかる直觀の力を恵まれるものだと云つてゐる。元來、歴史家が、無限雜多なる史料の世界を通じて把握を行ふ際には、——縱斷面にしても横斷面にしても——考察の對象たる實在を構成してゐると想定し得る若干の要素を擇出し、これを目標として始めて可能となるものである。然しが、かかる目標をたてる際には、其の擇擇の標準を、歴史家の信念として固定せる歴史觀に求むるか、又は、其の考察の場合々々の洞察的直觀に求むるか、より外はない。然るに、歴史家の歴史觀は一種の

歴史哲學的なものであり、歴史家の洞察的直觀にあつても、無意識的に彼の信念と時代思想とが關與することは云ふまでもない。史家獨特の世界觀に基いて把握の目標をたてた典型的な歴史家はランケであるが、之に對してブルクハルトは、むしろ時代の個性を洞察する一種の直觀に従つて把握するものと云へる。けれども、兩者の間に有する相異は、唯だ單なる程度の差であつて種類の差ではない。即ち歴史論理學上所謂「文化價値系統」の問題が此處に生ずるのであるが、ブルクハルトの如く、具體的な史實の世界にのみ沈潜してゐる全くポジティーフな立場からは、單に「直觀」と呼んで置くより名付けやうがない筈である。

勿論、ブルクハルトの如くラディカルな歴史家と雖も、其の「世界史的考察」に於ては、歴史を把握する目標として三個の grosse Potenzen を想定し、Staat と Religion と Kultur とを中心的要素と見做してゐる。<sup>(11)</sup> 歴史哲學者の中には、此の書をも其の方面の著書として扱はうとする人さへある程で、何處となく一種の——反省的思索に特有な——「哲學的微光」が存することは爭はれぬ。然し、彼の師ランケにあつては此の傾向が更に著しく、積極的に歴史現象を把握するにあたつても——純客觀

的でありながら——かゝる「微光」が現はれてゐる。それ故日下の問題——歴史的把握に於ける目標想定法——に就いては、史學の泰斗たるランケの著作を吟味することが適當な處置と信ずる。

既に前節に於いて述べたやうに、ランケの思想の中には、なほ獨逸理想主義の哲學が其の明らかな根跡を殘してゐる。此の種の哲學的色彩は「世界史的考察」として總括的把握を目的とする場合には、常に入り來ることを免れ難い。ブルクハルトの如く歴史哲學を評して Diese ist ein Kentaur, denn Geschichte, d.h. das Koordinieren ist Nichtphilosophie und Philosophie, d.h. das Subordinieren ist Nichtgeschichte. と罵り Weltgeschichtliche Idee の考察を斷念して誰だ Queldurchschnitte durch die Geschichte のみに其の勞作を限定しやうとするラディカールな歴史家に於ても、かゝる傾向の表はれ得ることは既に述べた通りである。ましてランケの如く「世界史的考察」が非常に魅力ある題目として不斷に彼の心を支配してゐた史家にあつては、一層濃厚に此の傾向を認めることが出来る。(勿論ランケとアルカバルトとの間には、師弟の關係を成立せしめた丈の充分な年代の相異があるが、どうぞなくとも上のこ

ルセ體あらねやい)。

スルヘの記かるるべくされば、<sup>(13)</sup>ハシケは既に叫へよる世界史の眞體見をや  
のやねだら。此の「世界史」の序として起草し後に取り下された通稿の内に彼せ  
ハキ。In frühen Jahren mit dem Unterricht in der Geschichte betraut und später dazu  
ausdrücklich berufen, habe ich die Idee einer allgemeinen Geschichte vor längst gefasst und  
niemals aus den Augen verloren.實體世界の體體<sup>(14)</sup>は、彼は die Zusammenhang  
der grossen Geschichte と、一種の體體<sup>(15)</sup>を、süß und verführelisch なむと言ふ。  
Q<sup>(16)</sup>きく、ハヌマヤ。更に此の體念は大膽な企圖とみや彼を促した。Die Mär  
der Weltgeschichte aufzufinden, jenen Gang der Begebenheiten und Entwicklungen unseres  
Geschlechtes, der als ihr eigentlicher Inhalt, als ihre Mitte und ihr Wesen anzusehen ist;  
alle die Thaten und Leiden dieses wilden heftigen Gewaltssamen, guten edlen ruhigen, dieses  
befleckten und reinen Geschöpfes, das wir selber sind, in ihrem Entstehen und in ihrer Gestalt  
zu begreifen und festzuhalten。——後年彼が歴史學上に残した數多くの偉大な功績は  
織り込んでゐる。

ランケの所謂 *grosse Geschichte* は個別的な範囲をテーマとした歴史的考察に於けるより、遙か濃厚に史家の個性的歴史觀を發露せしむるものであるから、彼の如く終始世界史的見地より考究を進めて行つた歴史家の著述は、以下の問題を窺ふに極めて好都合である。しかも彼特有の所謂 *leitende Idee* の思想に於ては、最もよく歴史的把握の典型的なる考へ方が表示されてゐる。（なほ「神の先見」と「歴史的發達」に就いてもランケの思想を分析してみると興味ある題目であるが、現在のテーマとしては切り棄てられるを得ない）。

leitende Idee と *Leitidee* をランケ自ら極めて多義に使用してゐるが、「進講錄」(Die Epochen der neueren Geschichte) の序説に於いて *ich kann also unter leitenden Ideen nichts anders verstehen, als dass sie die herrschenden Tendenzen in jedem Jahrhunderte sind* となじ例く *Leitidee* 大帝時代に就いて *Resümieren wir die leitenden Ideen, die seinem Jahrhunderte zu Grunde liegen*, so sind es in Kürze folgende: 1. Vereinigung von Kirche und Staat, 2. Bildung der Nationalitäten, 3. Verbindung des gesamten Europa, 4. Gründung der Kultur auf dieser Unterlage と述べてゐる。既にリッターが指摘してゐるやうに、

ランケは國家對教會の問題を以つて歴史を構成する主導要素と見做し常に之を目標として歴史的把握を進めてゐると考へて差支つかなくな。しかも一種歴史哲學的色彩を有するランケの一一大要素が常に對立して互に相容れん關係にあり共に歴史の「國家」と「教會」なる二大要素が常に對立して互に相容れん關係にあり共に歴史の oberste Träger と見做されてゐる。(アルクハルトの想定してゐるかの三個の grosse Potenzen ハンケの此の考へ方とを關係させてみると興味あることだある。

ランケは其の「歴史」及び「法王史」に於いては此の二大要素を互に相戰ふ關係に把握し、包括的な教會と割據的な國家とせ fast auf einer innern Notwendigkeit から互に帝國的關係に置かれてゐるもと見做すのである。Das geistige Leben, in seiner Tiefe und Energie allerdings ein und dasselbe, äussert sich in den beiden Institutionen des Staates und der Kirche, die sich in den mannigfältigsten Abwandlungen berühren, einander zu durchdringen oder auch zu beseitigen.

なほ「進講錄」に於いては多少上述の把握と異つた意見が述べられてゐる。大體

と就ひて曰く——國家と教會との二大要素と考へる論と就ひては——何様の  
あるが、ヨーロッパの取扱ひ方の特徴と辨證論的な點が著しく眼につく。最もかへ  
る意味から、ヨーロッパの考察に堪能し得ぐれ最も重要な資料と見做し得るが故に、  
トと其の必取な部分を抽出しえ。

……also weiche ich von der gewöhnlichen Ansicht ab, dass die einen sich auf die Seite des Staates, die anderen auf die Seite der Kirche, wieder andere auf die Seite der persönlichen Berechtigungen stellen, während ich behaupte, dass alle diese Elemente notwendig sind, dass auf dem Gegensatz des Besonderen und Allgemeinen die ganze europäische Geschichte beruht, und dass die Kirche ein Drittes ist, welches zwischen den persönlichen Berechtigungen und den allgemeinen Tendenzen des Staates in der Mitte stehend, sich für sich selbst entwickelt.

Fragt man, nach welcher Seite hin die Kirche mehr graviert, so ist die Antwort, dass sie in früheren Zeiten sich mehr auf die Seite der persönlichen Berechtigung gestellt hat, obwohl der Papst eine allgemeine Idee repräsentierte, dass sie aber gegenwärtig eine Tendenz nach der allgemeinen Staatsidee hin entwickelt, ohne ihrer Natur nach damit zu koincidieren,

da die kirchliche Idee etwas besondres, für sich Bestehendes ist. Ich muss bekennen, dass ein natürlicher Gegensatz zwischen Staat und Kirche besteht, das nie zu heben ist, denn würde der Staat der vollkommene Herrschaft erlangen, so würde er alles in seinem Umkreis vollenden müssen; es würde eine Staatskirche entstehen. Der Fürst aber, der das Allgemeine des Landes repräsentiert, soll, ohne die Gegensätze hervorzurufen, sich ihrer bedienen.

右の——甚しく哲學的な色調を帶びてゐる——引用文に明らかなるどく、國家對教會の關係が基調をなし、主導要素相互の交渉の内に歴史的展開が導かれるといふやうな一種辨證論めじた把握法の背後には、<sup>(22)</sup>ケーベルの巨大な影が付され、ついでゐることを見遁すわけに行かな。かくてランケは——恐らく不本意ながら——ドイツ理想主義者の名簿に記名せざるを得ない。カッシャーラー<sup>(23)</sup>やトーネルチが述べてゐるやうに、ライプニツに胚胎する内在的發展の思想はカントの道德哲學と相待つて、國家中心の歴史觀を成立せしめ、<sup>(24)</sup>ケーベルの辨證論的歴史觀となつて其の最も光彩ある姿を示すのであるが、かかる歴史觀は、唯に獨逸哲學を通ずる主要な題目の一つとして存在したばかりでなく、更に經驗的歴史學の範圍に

まで深い影響を與へ、歴史家の根本信念となつて、直接、把握法の主要目標を基礎づける結果となつた。ベルンハイムの如きは、ランケのイデーがヘーゲルの歴史哲学から出てゐることを認めるばかりでなく、更に此のイデーが、ランケからブルクハルトに傳はり、ブルクハルトからランブレヒトの文化史的把握にまで關係を及ぼしてゐることを說いてゐる。<sup>(24)</sup> ベルンハイムの意嚮は、時代思想の歴史的把握に及ぼす影響を立證しやうとするにあるが、かかる目論見は、また目下の考察に對しても役立ち得る。即ち、無限に雜多なる文化の狀態を一つのまとまつた形に要約することが必要なる限り、如何に客観的に科學的考察を行ふ場合と雖も、其の把握の基礎として歴史家の個性的信念を前提せざるを得ぬ。此の種の信念は系統的外觀を持たぬにしても兎も角も一種の歴史觀であり、最も廣い意味に於ける歴史哲學である。そして其の背後には、時代思想が遠くから、然し嚴然として、其の父たるの權利を主張しつゝある。ランケ自らは——「進講錄」の序説に於いて——鋭くヘーゲルの歴史觀を否定してゐるが、トレルチの評するごとく、そは明白なる一つの忘恩的行爲と云ふべれであらう。Das ist die Undankbarkeit grosser Söhne gegen ihre

geistige Väter, wie bei Hegel selbst oder Schleiermacher gegenüber Kant.

<sup>(25)</sup>

#### d 歷史的敘述と其の表現様式

敘述(又は表現)は歴史的考察の終局目的である。史實の洞察的理解に基いて把握の目標がたてられ、此の目標に従つて把握が行はれる。然し、云ふまでもなく、把握された内容は、同時にそれ自身表現するべき内容ではあり得ない。把握されたる素材的な内容は、目標に従つて整理されたる史料其物に外ならないが、表現の素材として使用されるものはかかる史料の代表的な一部であり、しかも表現の目的とするところは、史料以上の具體的な實在を、其のカラクテリスティックな姿に於いて再現することに存する。即ち、多面雜多なる史料の一部を以つて——しかかも之のみを以つて——史料の世界以上の、もつと遙かに具體的な歴史的實相の「感じ」を描き出すことが、表現の重き任務である。恰も肖像畫家が、僅少な描線と若干の輕い筆觸とを以てキャラクタルを——非常に生きく——と——描寫すると等し

く歴史家も亦其の史料を以つて——しかも煩瑣ならざるやう若干の極めて個性的なもの、さゝめのあるものののみを以つて——時代と人物とのカラクテルを表現しなければならない。それ故かかる歴史的再現の勞作には、必然的に一種創作的な手際が要求される。そして更に如何なる手段を如何に使用するかと云ふ技巧の種類と使用法との相異によつて、表現の様式が全く變つて来る。即ち各歴史家によつて、其の表現法に個性的な差別が生じて来る。

此處に創作的な表現の様式が問題となるからと云つても、文學的創作と歴史的叙述とが混同される恐れはない。歴史的叙述は、飽くまで史料に即しての表現であり、歴史的實在の再現を目的とする表現である限り、文學的創作とは嚴格に區別されるべし。オブヨクティーフであることが要求される。然しランケが Man kann von einer Historie nicht freie Entfaltung fordern, welche wenigstens die Theorie in einem poetischen Werke sucht; strenge Darstellung der Tatsachen, wie unbedingt und unschön sie auch sei, ist ohne Zweifel das oberste Gesetz <sup>(26)</sup> といつてゐるやうに、das oberste Gesetz が許す限りに於て、それに從屬する文學的色彩は許容される。否むしろ許容され

るばかりでなく理想としては要求されるべきものであらう。何故ならば、與へられた史料の一部——之は全然材料以上の何物でもない——を材料として、歴史的實在の個性的な具體性を最もカラクテリスティックシユに再現せんがためには、簡にして要を得たる、經路の明瞭な、そしてプラスティックシユな、具體性を有する表現が必要であり、且つかかる表現は、もつばら一種の創作的手際にのみ求め得るからである。即ちが、る意味よりランケの言葉を用ひて云へば、むしろ das oberste Gesetz としての strenge Darstellung der Tatsachen が最も完全に達せらるべきためには、必然的に表現上の特殊な技巧が要求される筈である。そこで、歴史的表現の技巧如何と云ふことが、純科學的な方法論上の問題として當然其の考察を要求する。

マルンハイムは、其の尊敬すべき方法論<sup>(27)</sup>に於いて Darstellung に三種の方面を區別し、Konzentration (od. Verdichtung) と Disposition と Vertretung とを擧げてゐる。第一に、整理されたる史料から知られ得る一切のことを全部表現することが不可能である以上前に述べたやうに、一種の集約を行ふ必要にせまられる。その關係は恰も音樂に於ける Orchesterwerk に對する Klavierauszug の關係に似てゐる。即ち、相

連闊せる複雑多様な音色を内蔵する管絃樂曲が一個のピアノにて演奏し得る樂符に書き換へられる場合に於いては、多くの音色音量が除去されるにも拘らず、曲の流れ行く關係やハルモニー、メロディー等は抄略されたる内容の儘で保存される。之と同じやうな集約がまた歴史家の表現にも行はれる。第二に、歴史上の事件は云ふまでもなく一つの時間的経過であるが、表現の順序は必ずしも事件の進んだ時間的経過の順序とは一致しない。むしろ、時間に關係なく叙述の目標となる中心點を定め、之に結びつけながら事件を叙述すべきものである。即ち表現上の排列には、事件の経過を明瞭に浮出させる目的から、一種特殊な——事實の時間的経過によるとは異なる——方法を必要とする。例へば繪畫に於ける遠近法が自然の空間的前後や遠近の別を平面的排列に換元して表はすと等しく、歴史的事件の描寫に於いても、時間的前後の關係を、叙述の特殊な排列法に従つて巧みに表現して行く必要がある。第三に、歴史的事件の個性は、事實上、極めて雑多な要素の各々の内に包含されてゐるのであるが、歴史家はかかる個性を表現するのに、若干少數の例示的事實によつて代表させねばならぬ。しかも、多數事實の中から代表的示

例を撰ぶ目的は、無味乾燥な一般的の概観を與ふるためでなく、事件の具體的な姿を眼のあたりに出来る文プラスティッショニに、描き出さんがためである。即ち此の場合に於いては、歴史的實在の具體的な個性を、例示的な僅かな材料によつて代表させつゝ、描寫する表現法と云ふものが、特殊な技巧として要求される。

かくの如く純粹科學の考察にあつても、表現上の手段としてなほ要求さるべき種々の技巧は、全く歴史家の個人的才能によつて決定されるものであるから、歴史家のやりくち次第で、表現上巧拙の差別も生ずるし、表現様式の相異も現はれて來る筈である。そこで歴史學に於いては、表現上の云はゞ「傑作」と稱すべきものを折りへ見出すことが出来る。例へば、ランケがマクシミリアン二世の賓客としてベンヒテスガーデンに滯在中、即興的に試みた進講錄——既にしばく引用した——*Die Epochen der neueren Geschichte* は、古典ローマの建國よりナポレオン以後の時代まで、世界歴史の起き伏す様を極めて短かい一編の内に、驚くべき具體的な鮮かさを以つて書き得た點に於いて、古今獨歩の叙述である。また、ブルクハルトの主著 *Die Kultur der Renaissance in Italien* は、かの複雜多面なる時代の諸相を詳細に分

析してトロハ一戯れ女の思ひ話の如れにまでも及ぶ一切の史料を、殆ど超人的な手際と洞察力を以つて整理し、ナンサンス時代精神の全貌姿を組み上げた其の巧妙なじ於にて、決して他の追踵を許せない。但くまでもなく、此等の典型的な「奇蹟的大作」は別としても、歴史的叙述が常に其の著者の癖や、なりぐちをみせてゐる點に於しては、殆ど藝術上の表現に近い事情にある。

今若干の代表的示例を求むるならば——例へば現代美術史界の權威なるウルフラン教授せ、イタリア美術の十世紀十六世紀の様式を比較するにあたつて、Frührenaissance das heisst uns feingliedrige, mädchenhafte Figuren mit bunten Gewändern, blühenden Wiesen, whende Schleier, luftige Hallen mit weit gespannten Bogen auf schlanken Säulen. Frührenaissance heist alle Mannigfaltigkeit des frisch Gewachsenen, was Art und Kraft hat. Schlichte Natur und doch ein wenig Märchenpracht dabei.

Misstrauisch und ungern tritt man aus dieser munteren, bunten Welt hinüber in die hohen stillen Hallen der klassischen Kunst. Was sind das für Menschen? Ihre Gebärde berührt uns plötzlich fremd. Wir vermissen das Herzliche, das Naiv-Unbewusste. Da ist keiner,

der uns vertraulich ansieht wie ein alter Bekannter. Da giebt es keine wohnliche Gemächer mehr mit lustig zerstreuten Hausrat, nur farblose Wände und grosse schwere Architektur.<sup>(28)</sup> と述べる。巧みな其の具體的表現法には教授獨特の難點がある。またウイーン學派の首領アロイス・ツィーグルがプラマンテの設計になるサン・ムヒトロ寺院の外觀を叙述して

Der Gesamteindruck nach aussen: reich und doch einheitlich durch die Kuppel; die Kuppel beherrschend, aber doch nicht überwältigend. Alles in notwendigem Zusammenhang:<sup>(29)</sup> Kraft und Last, und zwar trägt eines mit vollendet Leichtigkeit das andere.

と極めて簡結に記述してゐるあたり等は、其の彫刻的簡明さに於いて、其の道にたゞゐる者をして薄脣の敬意をはらはしむる表現法ともいへう。特に美術史の如く、それ自身「言葉なきもの」の叙述に於いては、アンシャウリヒな表現と云ふことが絶対に必要でしかも非常に困難なことであるから、それ丈にヨルフリンやツィーグルの表現法は貴い。藝術上の歴史的叙述に於いて往々行はれがちであつた惡趣味な——感激たつぱりな——「文學的形容」が、此等の尊敬すべく歴史家によ

つて完全に克服されつゝあるは眞に悦ばしき限りである。(音樂史上の表現法に於いては此の問題が一層複雑な關係に置かれてゐる。作品の描寫に關する Nordenbeispiel の用法等は表現法の技巧を研究する上で非常に興味ある問題たり得るやあらう。<sup>(30)</sup> 然し遺憾ながら音樂史の範圍に就いては私に云々する資格が全くない)。最後に歴史考察の全般に亘つて常に模範を示してゐるランケの表現法を示せば宗教改革時代に於けるイッの國情を述べる點に於て、

Die Unsicherheit der Strassen, der offenen Orte ward ärger als jemals; selbst arme fahrende Schüler, welche sich mit Betteln durchbringen, finden wir angesprengt und um ihre elende Barschaft gequält. Glück zu, liebe Gesellen, ruft Götz einer Anzahl von Wölfen zu, welche er in eine Schafherde fallen sieht, Glück zu überall: er hielt das für ein gutes Wahrzeichen.<sup>(31)</sup> ル・ル・ルの娘の味を知るやうに思ひ出せるが、流石に「文學の泰斗」たる彼の名に相應しふ難かぬやである。

以上の文例は、主としてアラスティッシュなアンシャウリヒな表現法の實例である。しかるに、排列法の巧妙なや集約上の手際に到つては、唯だ叙述全體の取扱方

から窺ひ得るのみであつて、短かい文例の内に示例し得ないものであるから、本稿中に引用することが出来ない。且つ、上に引用したやうな表現法ならば——純文學或は評論等に於ける表現法とは明らかに異なると云へ——歴史的考察法に理解なき人にも、なほ比較的容易に觀取し得るが、排列法と集約法との手際に到つては、純粹に史學特有の技巧であつて、此の方面の理解には相當な専門的素養を必要とする。かかる範圍内に於ける表現法の巧妙さを、今、若干のアナロギーを以て説明するならば下の如く云ふことが出来やう。即ち——大歴史家の叙述に於いては、恰も良く形式の整つた交響樂を聽く時のやうな、又は、場面の非常に引きしまつた演劇を觀る時のやうな、一種の強い力が断へず働いてゐて、讀む者の心を次から次へ、叙述の展開するまゝに何處までも、太く強く導いて行くものである——と。

それは、安價な感激の、歯の浮くやうな高調子でなくして、底力のある低く強い太さであり、感傷的な情緒の絢爛さではなくて、飽くまで落付きはらつた靜觀的な透明さである。そして其處には、一般藝術上の表現と同じく、各々歴史家の非常に個性的な獨特の様式が形作られる。かくて此處にも亦、洞察や把握の場合と等しく、歴史

家の個性的主觀の鮮かな顯現を觀取し得るのである。

## e 結辭として——歴史と文學——

純粹科學としての歴史學的勞作の中に歴史家の個性が濃厚に表はれることは、他の科學と區別される歴史學特有の本質的要素として、興味深い方法論上の題目たり得るであらう。上に述べて來たやうに、歴史學上の主觀性は、一面に於いて、歴史家の人格的個性とその世界觀的な哲學的反省とに基く主觀性であると同時に、他面に於いては、藝術めいた表現上の才能に依存する主觀性である。しかも、かかる意味に於ける個性的要素は、終始「史料」の世界によつて厳格に制約されてゐる。

唯だ然し、「史料の世界」が、歴史學の對象としての歴史的實在の、具體的なる相より隔具こと遠きものである限り、歴史學は、直接所與としての「史料の世界」を通じて、かのる體的な實在を「理解」し「把握」し「表現」するものでなければならぬ。そこで歴史家は自己の體驗と洞察力とに基いて眞に具體的なる實相を「理解」し、自己の歴史觀を通

じて實在を把握し、自己の才能に準じて歴史の姿を再現する。かくの如く、常に歴史家の個性が深く關係するため、歴史學は其の純粹科學としての規法を脅かされ、ともすれば邪道に陥らうとする危嶮をもつてゐる。淺薄な——多くは文學的臭味に捕はれてゐる——通人達は、好むで此の種の非學術的な表現を求め、所謂る「史家の創見」てふ假面を被れる——實は極めて陳腐な——「思ひ着き」を悦び、空虚な徒らに感激した文字のみを求める。そればかりではない——驚くべきことには——「歴史家」と自稱する人の中にも、安價な、甘い言葉を並べて歴史を愛するが如く裝ひ、或はまた、淺はかな皮肉や、こねあげた理窟や、荒寥たる「フイロゾフイーレン」を以つて、洞察の銳さを衒はうとする者さへある。然し、素直に事實を受け入れることの出來ない人は、歴史家たる第一の素質を缺くものと云へる。

經驗的科學としての歴史學を歴史哲學や文學から區別する境界は、唯だ一筋の劃線に過ぎない。歴史學をして歴史哲學たらしめず、文學たらしめぬ規準は「史料本位」と云ふことである。一切の歴史的考察は唯だ史料のみを材料として使用し得る。そして、考察の對象は唯だ歴史的實在である。歴史的實在の具體的な相を

再現すること丈が歴史學に許された唯一の目的である。それ故、一面に於ては常に時代思想の影響を受け歴史家の個性的色彩を帶ぶるとは云へ、其の史料の取扱ひ方に就いては、時代と共に連續的發達の跡を辿り得る。年代の考察、史料の考證、其他幾多の補助學科の應用が進むにつれ、歴史的考察に科學的確實性を増進すべき新手段は不斷に供給されつゝある。かくて研究法の進歩は、他面に於いて、かの時代思想の影響や歴史家の個人的色彩が、不當なる範圍まで侵入することを阻止し得るであらう。さればまた、歴史的考察の内には如何に濃厚に主觀的因素が存するとは云へ、「叙述されたる歴史」は純然たる科學的成果であつて、決して藝術的創作ではない。フローベルの「サランボー」やメレシュコフスキイの三部作、又はトルストイの「戦争と平和」や K.F. マイヤーの多くの短篇が、何れ程歴史の範圍に接近してゐやうとも、要するに文學はやはり文學である。時として彼等を「歴史家」と呼ぶことはあつても、それは唯だの比喩であるに過ぎない。別な場合に於いては文人を「心理學者」と稱し得る意味に於いて「歴史家」となすにすぎない。ディルタイは其の心理學上の問題に就いて、文人の直觀が科學者の研究より、精神生活の具體性に

より近じてゐることを指摘してゐる。歴史學の範圍に於じては、創造の業を同どするヒロバの力を深く意味に於じて理解し得ずして、徒らに荒寥たる史料の廣野に彷徨する者は、むしろ藝術家の激測たる直觀に學ぶところあらねばならぬ。然しそ最も正しかり仕方に於じて彼等の個性を生かし、其の主觀性を客觀的考察の内に織り込みながら、彼等に課せられたる科學的使命を完うしたることに就じては、多くの偉大なる歴史家達の勞作に對し、無限の敬意を捧げんを得ない。(終)

## 註

- I Bernheim, Lehrbuch der historischen Methode S. 6
- II Springer, Der gegenwärtige Stand der Geisteswissenschaften und die Schule S. 11 (註記參照)
- III Fichte, Die Bestimmung des Menschen, S.W.H. S. 283
- IV Kant, Kritik der Praktischen Vernunft, Phil. Bibl. S. 205
- V Ranke, Die Epochen der neueren Geschichte, hrg. von Dove S. 16
- VI Dilthey, Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie, S.W.V.S. 143-4
- VII Dilthey, Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften
- VIII Dilthey, Die Entstehung der Hermeneutik S.W.V.S. 318-9
- IX Gundolf, Shakespeare und der deutsche Geist. Vorwort S. VIII
- X Burekhardt, Die Kultur der Renaissance in Italien, Einleitung

- 11 Burckhardt, Weltgeschichtliche Betrachtungen S. 1
- 11 Ebda S. 2
- 111 A. Dove, Vorwort (für Rankes „Epochen“)
- 111 Ebda S. 1
- 111 Ebda S. 2
- 111 Ebda S. 2
- 111 Ebda S. 2
- 111 Ranke, Epochen hrsg. von Dove S. 18
- 111 Ebda S. 51
- 111 M. Ritter, Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft (Ranke)
- 111 Ranke, Deutsche Geschichte
- 111 Ranke, Epochen S. 44
- 111 Cassirer, Freiheit und Form S. 490
- 1111 Troeltsch, Über den historischen Entwicklungsbegriff und die Universalgeschichte. S.W.III. S. 243
- 1111 Bernheim, Lehrbuch 3, 4 aufl. S. 631
- 1111 Troeltsch, S.W.III.S. 271
- 1111 Ranke, Geschichte der romanischen und Germanischen Völker, Vorrede
- 1111 Bernheim, Lehrbuch der historischen Methode 6. K., Darstellung, „Bernheim, Einleitung in die Geschichtswissenschaft (『歴史「歴史と社會』取扱説明書)

118 Woelflin, Die Klassische Kunst. Einleitung S. 2

119 A. Riegl, Barockkunst in Rom S. 76

120 1 種の誠心の歎嘆をもつて—Bekker, Beethoven

121 Ranke, Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation

註記。ナーランブルからは便宜上單に上の翻案だけを借りた。

然し私は此の流行兒の思索法を非常に嫌ふ。

誤解なきより御断りして置く。